

編者あとがき

この別冊 18 号を「続・パロディと日本文化」と題する。別冊 16 号「パロディと日本文化」に続いての特集だからである。本号は「パロディと日本文化」と題した文科省科学研究費補助金による研究（平成 19 年度～平成 21 年度 基盤研究 総額 1280 万円 代表ツベタナ・クリステワ）の成果の一部である。

「パロディと日本文化」科学研究プロジェクトは、2005 年 11 月 12 日の本研究所主催によるシンポジウム（その成果は別冊 16 号に収録）を含めて、以下のように 3 回に渡って国際シンポジウムを開催してきた。

第一回

2005 年 11 月 12 日 於国際基督教大学 (ICU) 湯浅八郎記念館

開催挨拶：M. ウィリアム・スティール (ICU 教養学部長)

高澤紀恵 (ICU アジア文化研究所所長)

「パロディの理論」ツベタナ・クリステワ (ICU 教授)

「百鬼夜行絵巻の図像を読む」小峯和明 (立教大学教授)

「『小紋雅話』の仕掛け——山東京伝絵画本のパロディ」岩崎均史 (「たばこと塩の博物館」主席学芸員)

「『聖人の道』と『色道』」小島康敬 (ICU 教授)

“Where Did the Parody Go?: History and Ethnicity in Early Meiji Fiction” John Mertz
(ノースカロライナ州立大学準教授、ICU アジア文化研究所客員研究員)

「中国文化におけるパロディ」古藤友子 (ICU 教授)

パネル・ディスカッション：司会 M. ウィリアム・スティール (ICU 教授)、広瀬正宜 (ICU 教授)

第二回

2009 年 3 月 13・14 日 於パリ国際大学都市日本館 フランス国立東洋言語文化研究学院 (INALCO) との共同開催

3 月 13 日 (金)

開会挨拶：アンヌ・バヤール＝サカイ (INALCO 日本研究所所長)

基調講演：「元の妻、新しき妻——平安時代のパロディ——」ツベタナ・クリステワ (ICU 教授)

第 1 セッション：司会 クレール・ブリッセ (パリ・ディドロ大学准教授)

「お伽草子と狂言——料理・異類・争論——」小峯和明 (立教大学教授)

「中世における清少納言の『パロディ』」エヴリン・ルシーニュ＝オドリ (INALCO 日本研究所博士課程／東京大学大学院研究生)

「江戸時代の禁教下での『伝承から生成するパロディ』」高崎恵 (ICU アジア文化研究所研究員)

「『本朝文粹』におけるパロディと言葉遊び——「鉄鎚伝」をめぐる——」ジュリアン・フォーリ (INALCO, EPHE 博士課程／日本言語文化教育資格教官)

第2セッション：司会 ミカエル・リュケン（INALCO 日本言語文化学部部長）

「西鶴のパロディ——『好色一代女』を中心に——」ダニエル・ストリューブ（パリ・デイドロ大学教授）

「1枚のパロディ絵画をめぐる——なぞなぞ・笑い・文学——」安原真琴（立教大学兼任講師）

「江戸の寺社開帳を見世物化した「とんだ霊宝」とその艶本のパロディ」クリストフ・マルケ（INALCO 教授）

「パロディとしての「のらくろ」」宮沢恵理子（ICU アジア文化研究所研究員）

「現代日本のまんが文化におけるパロディ」田頭正太郎（ICU 大学院比較文化研究科博士後期課程）

3月14日（土）

第3セッション：司会 エステル・レジェリ＝ボエール（INALCO 日本研究所准教授）

「明治時代におけるパロディと政治：中江兆民の『三酔人経綸問答』と「喜悦の哲学」」エディ・デュフルモン（INALCO 日本研究所研究員／ボルドー第三大学講師）

「朴趾源の『兩班伝』に見える社会身分構造のパロディ」ケネス・ロビンソン（ICU 上級准教授）

「書とパロディ——中村不折の龍眠帖——」レイリ・ドール（INALCO 日本研究所博士課程）

「パロディにみる中国の文人官僚」古藤友子（ICU 教授）

第三回

2009年11月27・28日 於国際基督教大学本部棟206

11月27日（金）

開催挨拶：ツバタナ・クリステワ（ICU 教授）

小島康敬（ICU アジア文化研究所所長）

午前のセッション：司会 小峯和明

「パロディ・見立て・テクスト——鈴木春信の「座敷八景」——」ハルオ・シラネ（コロンビア大学教授）

「江戸時代見立図像化の形成」渡辺雅子（メトロポリタン美術館研究員）

「近世文藝においてパロディとは何だったのか——マクロのパロディからミクロのパロディへ——」染谷智幸（茨城キリスト教大学教授）

午後Ⅰのセッション：司会 M. ウィリアム・スティール（ICU 教授）

「やつしと見立絵にみるジェンダー」ジョシュア・モストウ（プリティッシュ・コロンビア大学教授）

「パロディ繚乱の江戸文化——「性」と「聖」とを繋ぐ笑い——」小島康敬（ICU 教授）

「江戸時代の民画におけるパロディの精神——大津絵再考——」クリストフ・マルケ（INALCO 教授）

午後Ⅱのセッション：司会 古藤友子（ICU 教授）

「歌仙の絵と〈もどき〉」高橋亨（名古屋大学教授）

「文学や図像における「死」の演出からパロディへ」ジュリアン・フォーリ（INALCO 助手）

「排耶書にみるパロディ性」高崎恵（ICU アジア文化研究所研究員）

11月28日(土)

午前のセッション：司会 小島康敬

「パロディと主体」竹村信治（広島大学教授）

「擬古の技巧——詩的カノンのパロディとしての中世王朝物語——」ツベタナ・クリステワ（ICU 教授）

「物語再生装置としてのパロディ——『平家物語』を軸に——」小峯和明（立教大学教授）

午後Ⅰのセッション：司会 高橋徹（名古屋大学教授）

「『源氏物語』における継母子譚の位相」張龍妹（北京日本学研究中心教授）

「継子譚のパロディと話型」金鍾徳（韓国外国語大学校教授）

「中国食文化にみるパロディ——「仮(もどき)」料理管見——」古藤友子（ICU 教授）

午後Ⅱのセッション：司会 高崎恵（ICU アジア文化研究所研究員）

「明治初期の囀り (twitter)——新旧メディアと『学問ノススメ』のパロディ——」M. ウィリアム・スティール（ICU 教授）

「パッチワーク・パロディ——横糸としてのネタ、縦糸としてのサブテキスト——」田頭正太郎（ICU 大学院比較文化研究科博士後期課程）

総合ディスカッション：司会 ツベタナ・クリステワ（ICU 教授）

別冊 18 号は、パリでの国際シンポジウムでの報告論文のうち寄稿されたものを中心に編集した。国際基督教大学を会場とした国際シンポジウムの成果については、後日笠間書院から単行本の形での出版を予定している。

当研究所ではこれまで多くのシンポジウムを企画・実行してきた。しかし、今回のような楽しいテーマのもとでのシンポジウムはなかったのではなかろうか。絶え間ない紛争、出口の见えない世界不況、地球的規模での自然破壊、私達は深刻な事態に直面している。「シリアスな状況下で、パロディとは何と脳天気なこと」と見る向きもあろうが、こうした硬直した状況だからこそ、ゆとり、遊び、笑い、が必要とされる。人間に固有のユーモアの精神こそが希望を紡ぎ出す底力となる。ユーモアが世界を救う。それぞれのシンポジウムは、報告者の方々による、しなやかな感性と鋭い知性、そして機知に富んだ、文字通りの饗宴であったことを付記しておく。

所長 小島 康敬